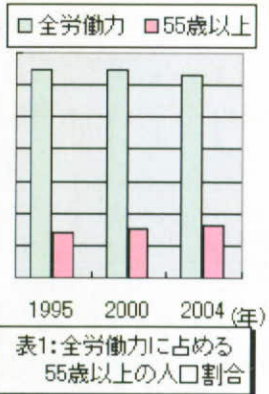


心が温まる！？ アニモなお話

さてここから私たち、Man to Man G Animo. com株式会社(以下Animo=アニモ)という会社について詳しくお話させてもらいたいのですが、より深くご理解して頂きたく…少々長いご説明におつきあい下さい。

我が国における労働力のお話

総務省統計局によると平成17年の労働力人口は6,650万人とのことで、
少子高齢化等の影響で厚生労働省の推測では2025年に約6,300万人
で減少し、その後も減り続けるとのことですが、これはいささか楽天的
数値であるとの声が多く、悲観的な研究機関では2025年の段階で6,0
万人を割込むと予測しています。減少していく労働層の中心は、若年
中心とした59歳以下の男性層ですが、対象を細分化すると当然増加
層もあるわけで、代表的なのが主婦層、60歳以上の高齢者層であると
われています。



我が国における労働力としての障害者についてのお話

次に、我が国における障害者数はどれ位かご存知ですか？障害者白書平成18年版によると、18歳以上の身体障害者数は、約342.6万人で知的障害者数は約34.2万人。この人数は調査を開始した昭和26年から一貫して増加しています。加えて精神障害者数(20歳以上)は約243.6万人であり、総計620万人という非常に大きな数値となります。ちなみにこの数字は全人口の5%以上に相当します。

一方、民間企業における障害者(身体障害者+知的障害者)の実雇用率は1.48%となっています(平成17年12月厚生労働省発表)。あくまでも感覚的な掴み方で恐縮ですが、上記の労働力人口と照らし合わせて、620万人の18歳以上の障害者の方が存在する現実。その中には肉体的に働けない方も多く入っていることを考慮したとしても企業側の受入れ体制に起因した「働きたくても働くことができない人」が非常に多く存在しているということです。

私たちはこの状況について社会倫理的にあれこれ論じるつもりは全くなくて、今後労働力人口がマクロ的に減少する中で、ただただシンプルに貴重な労働戦力として「勿体無い」と思うのです。

障害者就労の可能性の枠を広める情報化についてのお話

e-JAPAN戦略とお聞きになると、「また随分手垢のついた言葉を引っ張ってきたなあ」と思われる方が多いかもしれませんが、これは2000年に当時の森首相が打ち出した構想で、「全て日本国民が情報技術を活用できる環境をつくろう。」というものです。それから6年。その良し悪しはともかく、たしかに情報インフラは驚異的に整備されました。そして、それに伴うライフスタイルや労働形態も大きく変化してきています。障害者就労環境という観点からみると、肉体的なハンディにより従来では考えられなかった仕事がパソコンや周辺機器があれば、十分対応可能となりました。障害者の障害の程度や区分にもよりますが、情報機器を活用することで障害者が活躍できる可能性は大きく広がっているのです。

そして…アニモの名前のお話

少し蛇足です。社名のMan to Man G Animo.comのAnimo(アニモ)という名前、結構多くの企業さんが企業名に取り込んでいますが、スペイン語で「頑張れ！」とか「元気だして！」という意味です。英語の「ファイト」に近いですね。語感の優しさと相まって、ソフトな暖かいイメージがします。

1992年のスペイン・バルセロナオリンピックの時に、女子マラソン銀の有森裕子選手が沿道から「アニモ！」「アニモ！」と声を掛けられてとても元気付けられたというコメントを残しているのが印象的でした。